

クシェーメンドラの詩論書に引用される ラージャシェーカラの詩節について

山 崎 一 穂

【キーワード】 中世インド、クシェーメンドラ、ラージャシェーカラ、詩論、適切性

1 はじめに

Bhavabhūti (8世紀)の作品を以て頂点を迎えた Kālidāsa (4-5世紀)以後の古典戯曲文学が斜陽を迎える中で、最後の曙光を放ったのが Rājaśekhara (9-10世紀頃)である¹⁾。彼は二大叙事詩を戯曲化した *Bālarāmāyaṇa* (『幼児の為のラーマヤナ』、*Bālar*) と *Pracaṇḍapāṇḍava* (『激怒せるパーンドゥの一族』、*Pracaṇḍ*) の著者としてだけでなく、詩論書 *Kāvyamīmāṃsā* (『詩学探求』) を著した詩論家としても知られている。彼の戯曲作品の評価をめぐるは賛否両論あろうが、この問題はインドの伝統的な文学鑑賞法を措いて議論されるべきではない。また Rājaśekhara の詩節が詞華集や詩論書に多数引用されていることは、彼の作品がインド古典文学の著作家に多大な影響を与えていたことを物語る。

Kṣemendra (990-1066年頃) もそうした作家の一人であった。Kṣemendra は多方面で著作を残したが、詩学に関する著作として我々の手元に残されているのは次の三つである。すなわち、詩人を志す者への実用的な手引書たる *Kavikaṇṭhābharāṇa* (『詩人の首飾り』)、韻律論書 *Suṃṛttatilaka* (『優れた韻律の標』、*Suṃṛ*) 及び本論に取り上げる詩論書 *Aucityavicāracarcā* (『適切性に関する論考』、*Aucitya*) である²⁾。

Kṣemendra の著作はインド人の嗜好に適合しなかったこともあり註釈家にも顧みられていない。このことも手伝って彼の作品は19世紀後半から20世紀初頭にかけてテキスト刊行がなされて以降研究者の関心を集めることがなかった。しかし近年 Kṣemendra の教訓詩作品、仏教説話作品の外的批判を目的とする研究が欧州の研究者を中心になされつつある。こうした研究を行う上で Kṣemendra 自身の詩論を把握しておくことが重要であることは既に WILSON [1980] が指摘する通りである。すなわちテキストレベルでは、テキストの読みを決定する直接的証拠がない場合、想定される読みを Kṣemendra の詩論と適合するか否か検討することによって一つの状況証拠を与えることが可能になる。物語材源のレベルでは、作品中に材源と考えられる伝本の記述と齟齬をきたす記述が存在する場合、それが原本に基づくものか、Kṣemendra の創作に基づくものか決着を付ける上で Kṣemendra 自身の詩論が一つの判断基準となり得るのである³⁾。

このような重要な指摘が三十年以上前になされているにもかかわらず、Kṣemendra の詩論に関する研究は未だ十分ではない。Kṣemendra の仏教説話作品 *Avadānakalpalatā* 第64章の校訂、

翻訳研究を発表した STRAUBE [2006] では Kṣemendra の詩論書 Aucitya に引用された *Avadānakalpalatā* の詩節が本文校訂に当たって参照されている⁴⁾。しかし材源問題の検討に Aucitya に説かれる詩論が援用された形跡は同書に見出され得ない。Kṣemendra の詩論書のみを対象とした研究としては SŪRYAKĀNTA [1954] による英訳研究があるが、詩論に展開される〈情調〉(rasa) や〈詩的美質〉(guṇa) といった概念に関する詳細な論考はなされていない。これらの諸概念の問題は RAGHAVAN [1963, 1973] の中で取り上げられているが、Kṣemendra の詩論書全般の細かい検討に基づくものとは思われない。

上記問題点に照らし、筆者は Kṣemendra の *Avadānakalpalatā* の材源問題の検討に詩論的立場からアプローチすることを目的として Aucitya に説かれる詩論の解明を課題としている。しかし限られた紙面で Aucitya 全体を仔細に検討することは不可能である。本論は Kṣemendra が Aucitya に例示詩節として引用する Rājaśekhara の詩節を基に (1) Kṣemendra が Aucitya に説く八種の〈適切性〉(aucitya) の性格及び (2) 同書における彼の詩論家としての態度を解明することを目的とする。複数の詩人から Rājaśekhara のみを取り上げるのは、彼の活動年代が Kṣemendra のそれに近く、当時流行した梵語古典文学の作風を考察する上で有益であり、また後述するように Kṣemendra 自身が Rājaśekhara の作品を強く意識していたと考えられるからである。また八種の〈適切性〉を取り上げるのは、これらが〈詩的美質〉や〈情調〉の〈適切性〉といった、9世紀以降の詩論において重要な概念と見做されるものであるからである。

2 Aucitya の構成

Aucitya は33の詩節とそれに対する散文の自註から構成される詩論書である。同書の末尾に付されたコロフォンの記述によれば Kṣemendra は自身の友人 Ratnasimha の息子 Udayasimha の為 Ananta 王 (在位1028-1063年) の治世下にこの書を著したという⁵⁾。彼は第11-39詩節で詩作における27種の〈適切性〉について適切な例と不適切な例を挙げて説明する⁶⁾。しかし彼自身は〈適切性〉に関して一詩節で短い定義を与えるのみであり⁷⁾、また如何なる作家から〈適切性〉に関する理論を継承していたのかについても明言していない。しかし同書が Ānandavardhana (9世紀) によって提唱され、Abhinavagupta (10-11世紀) によって完成された詩論体系を前提に〈適切性〉について論じた書であることは、RAGHAVAN [1973: 268-270] が指摘するように、Aucitya 第3-5詩節に表明される Kṣemendra の見解から知られる。

美しいものを賞味する時〈感動〉(camatkāra) をもたらすものであり、〈情調〉の命にも等しい〈適切性〉の論考を今〔Kṣemendra は〕行う。カーヴィアに諸々の〈修辞〉は不要であるし、誤って数え上げられた諸々の〈詩的美質〉が何の意味を持とうか。それ(カーヴィア)の命とは〈適切性〉である。〔〈適切性〉を人は〕認知するとしても、視覚認識はしない。〈修辞〉は常に装飾品に他ならず、〈詩的美質〉は常に性質に他ならない。しかし〈適切性〉は〈情調〉

によって完成されているカーヴィアの永遠の命である⁸⁾。

以上を Kṣemendra は Aucitya 115.13-19において次のように補足説明する。

相互に補助し合う、魅力的な言葉と意味を本質とするカーヴィアの〈直喩〉(upamā) や〈詩的空想〉(utprekṣā) 等の多くの〈修辞〉は、腕輪や耳飾り、上膊の腕輪、首飾り等の如く、装飾品に他ならない。外的な美の原因であるから。カーヴィアの〈詩的美質〉、つまり何とも表現し難い、それ(〈詩的美質〉)の特徴をよく知る者達によって伝統的に受け継がれているものも、学問や真実、善き品行等の如く、性質に他ならない。除かれてもよいものであるから。一方、まず初めにその特徴が説明されるであろう〈適切性〉はカーヴィアの永遠不滅の命である。それ(〈適切性〉)がなければ、これ(カーヴィア)は〈詩的美質〉や〈修辞〉と結び付いていても、命を欠くからである。〈恋情〉(śṛṅgāra) 等の〈情調〉によって完成され、広く知られているカーヴィアは、錬金術に用いる水銀(rasa)で完成されるもの(黄金)[がそれ(黄金の適切性)を永遠の命として持つ]ように、それ(〈適切性〉)を永遠の命として持つという意味である⁹⁾。

カーヴィアは〈情調〉によって完成されるのであり〈情調〉及びカーヴィアの「命」(jīvita)が〈適切性〉だというのである。従って Kṣemendra の見解に従えば〈適切性〉を欠いたカーヴィアは仮に〈修辞〉、〈詩的美質〉を備えたものであっても無意味なものであることになる。この彼の見解は恐らく Ānandavardhana が〈詩的美質〉と〈修辞〉と〈情調〉の関係について *Dhvanyāloka* 第二章第七詩節で表明する次の見解を踏まえたものであろう¹⁰⁾。

[直接表示される意味と直接表示する語をその特徴とする] 従属要素を持つ、その〔〈情調〉等をその特徴とする] 意味に依存するものが諸々の〈詩的美質〉だと伝承されている。

一方、従属要素に依拠するものが諸々の装飾(〈修辞〉)だと考えられるべきである。腕輪などの如く¹¹⁾。

すなわち〈詩的美質〉は〈情調〉からなる意味に依存し、〈修辞〉は直接表示される意味と直接表示する語からなる従属要素に依存するが故に、三者のうちでは〈情調〉が最も重要であると言うのである。*Dhvanyāloka* に対する注釈書 *Locana* の著者 Abhinavagupta は比喩を用いた以下の一文で Ānandavardhana のこの見解を明確に説明している。

すなわち耳飾り等を取り付けられても、意識のない屍は美しく見えない。飾られるべきものがないから。腕輪等を結び付けられた隠者の体は笑いをもたらすものとなる。飾られるべきものが不適切であるから¹²⁾。

従って Aucitya に展開される Kṣemendra の詩論は Bhāmaha (七世紀後半から八世紀後半の間)と Daṇḍin (七世紀後半から九世紀の間)に代表される〈修辞〉をカーヴィアの命と見なす詩論体系ではなく、〈情調〉が〈詩的美質〉や〈修辞〉に優越するという Ānandavardhana と Abhinavagupta の詩論体系に基づいていることが知られる。Kṣemendra が両者と見解を異にす

るのは〈適切性〉を「〈情調〉によって完成されるカーヴィアの永遠なる命」(aucityam rāsasiddhasya sthiram kāvyasya jīvitam) としている点である。Abhinavagupta は *Dhvanyāloka* 13.1-2 に対する *Locana* において〈情調〉の〈暗示〉がカーヴィアの命であると次のように明言している。

「適切な」という語で、〈適切性〉は〈情調〉を対象とするものに他ならないということを示して、〈情調〉の〈暗示〉が〔詩の〕命であることを〔Ānandavardhana は〕示唆している。実にそれ（詩の命たる〈情調〉の〈暗示〉）がなければ、何に依拠してまさにこの〈適切性〉が至る所で起こるのであろうかということが意図されている¹³⁾。

以上を総合すると、非常に大雑把ではあるが Aucitya における Kṣemendra の詩論に対する基本的姿勢は次の如くに要約されよう。すなわちカーヴィアを成立せしめるものは〈情調〉であり、これは〈詩的美質〉と〈修辞〉に優越する。しかし〈情調〉は〈適切性〉が存在して初めて命を得るのであり〈適切性〉は〈情調〉に優越する¹⁴⁾。Kṣemendra が〈適切性〉が〈情調〉に優越することを「〈適切性〉は〈情調〉によって完成されるカーヴィアの永遠なる命」であると遠回しに表現しているのは、先師 Ānandavardhana のみならず、自らの詩学の師であった Abhinavagupta の見解を正面から否定することを避けようとしたことによるものであろう¹⁵⁾。

3 Aucitya に引用される Rājaśekhara の詩節

Kṣemendra が Rājaśekhara を意識していたことは *Suṅg* 第三章第26-35詩節の内容から知ることが出来る。彼は特定の韻律に習熟して自らの著作を周知させ得た八人の詩人の名を当該個所で挙げている。Kṣemendra はその八人のうち Rājaśekhara を韻律 *sārdūlavikrīḍita* の使用に長じた詩人に数えている¹⁶⁾。また彼は Rājaśekhara に帰せられる詩節を *Kavikaṅṭhābharaṇa* に一詩節、*Suṅg* に二詩節、Aucitya に10詩節程例示詩節として引用している。Kṣemendra の詩論書における Rājaśekhara の引用総数は Kālidāsa に次いで二番目に多く、彼が Rājaśekhara を先達として強く意識していたことを裏付ける。この他憶測の域を出るものではないが、韻律使用傾向や声喩法の愛好といった作風上の共通点も両者の親近性を示唆するように思われる。

Kṣemendra は〈文〉、〈作品の意味〉、〈詩的美質〉、〈修辞〉、〈情調〉、〈行為実現要素〉、〈場所〉、〈状態〉の〈適切性〉を説明する Aucitya 第12-15, 17-18, 20, 27, 36詩節の例示詩節として Rājaśekhara の詩節を挙げている。このうち Rājaśekhara の現存作品中に詩節が求められ得るのは七詩節で、残る三詩節のうち二詩節は詞華集にのみ収録されており、一詩節は Aucitya 以外に引用されていない。

3.1 〈文〉の〈適切性〉

Rājaśekhara の詩節の最初の引用は Aucitya 第12詩節の説明においてなされる。Kṣemendra は当該箇所では〈文〉の適切性について議論する。

[Aucitya 12]

aucityaracitaṃ vākyaṃ satataṃ sammatam satām |
tyāgodagram ivaiśvaryaṃ śilojjvalam iva śrutam ||

聡明な者というのは〈適切性〉を備えた〈文〉を常に高く評価するものである。喜捨で誉れ高い支配、善き品行で輝く知識〔を善き人が高く評価する〕ように。

Kṣemendra は〈適切性〉を備えた〈文〉の例として Bālar 第10幕第41詩節を挙げる。

[Bālar 10.41]

sambandhī purubhūbhujāṃ manasijavyāpārādīkṣāgurur
gaurāṅgīvanopamāparicitaḥ tārāvadhūvallabhaḥ |
sadyomārjītaḥ śiṅhātātaruṇīdantāvādātadyutiś
candraḥ sundari dṛśyatām ayam itaś caṇḍīśacūḍāmaṇiḥ ||

美しき女よ、チャンディーの主人（シヴァ）の頭頂の宝珠たるこの月をここから見よ。〔それは〕プルの諸王の親族であり、情交を伝授する教師であり、色白の女の顔に似ているが故に〔世間に〕周知されており、星という妻達の愛しい夫であり、俄に磨かれた、南方の娘の歯のようにその光が燦々と輝いている。

上掲詩節で「月」（candra）と同格関係にあるのは以下の六つの名詞もしくは形容句である。

- (1) sambandhī purubhūbhujāṃ 「プルの諸王の親族」
- (2) manasijavyāpārādīkṣāgurur 「情交を伝授する教師」
- (3) gaurāṅgīvanopamāparicitaḥ 「色白の女の顔に似ているが故に〔世間に〕周知されている」
- (4) tārāvadhūvallabhaḥ 「星という妻達の愛しい夫」
- (5) sadyomārjītaḥ śiṅhātātaruṇīdantāvādātadyutiś 「俄に磨かれた、南方の娘の歯のようにその光が燦々と輝いている」
- (6) caṇḍīśacūḍāmaṇiḥ 「シヴァの頭頂の宝珠」

これら六つの名詞もしくは形容句は全て月と適合するものであるが故に〈適切性〉を備えた〈文〉の例となり得ると Kṣemendra は説明する¹⁷⁾。以上に対し〈適切性〉を欠く〈文〉の例として Kṣemendra は同じく Rājaśekhara の戯曲 Pracand 第100詩節を挙げる。

[Pracand 100]

nāle śauryamahotpalasya vipule setau samidvāridheḥ
śaśvatkhaḍgabhujaṃgacandanatarau krīḍopadhāne śriyaḥ |
ālāne jayakuñjarasya sudṛśāṃ kandarpadarpe paraṃ

śrīduryodhanadoṣṇi vikramapare līnaṃ jagan nandatu ||

武勇という大蓮華の茎であり、戦場という大海に掛る長大な橋であり、絶えず剣を携える者（兵士）という伴侶にとっての白檀木であり¹⁸⁾、吉祥天が戯れを求めて寄り掛かる場所であり、勝利をもたらす象〔を繋ぎ止める為〕の杭であり、美しい眼をした女達の性愛への自負の源である、吉祥なるドゥルヨーダナの、勇武だけを専ら追求する腕に身を寄せる生類は大いに歓喜せよ。

上掲詩節で「吉祥なるドゥルヨーダナの腕」(śrīduryodhanadoṣṇi) と同格関係にあるのは次の六つの名詞である。

- (1) nāle śauryamahotpalasya 「武勇という大蓮華の茎」
- (2) vipule setau samidvāridheḥ 「戦場という大海に掛る長大な橋」
- (3) śaśvatkhaḍgabhujaṃgacandanatarau 「絶えず剣を携える者（兵士）という伴侶にとっての白檀木」
- (4) krīḍopadhāne śriyaḥ 「吉祥天が戯れを求めて寄り掛かる場所」
- (5) ālāne jayakuñjarasya 「勝利をもたらす象〔を繋ぎ止める為〕の杭」
- (6) sudrśāṃ kandarpadarpe 「美しい眼をした女達の性愛への自負の源」

以上の六つの名詞のうち、(2)-(6) を「腕」(dos) と比べることは適切であるが、(1) 「大蓮華」(mahotpala) の「茎」(nāla) を「腕」と比べることは不適切であり、それによって文意を滑稽なものになしてしまうと Kṣemendra は言う¹⁹⁾。

3.2 〈作品の内容〉の〈適切性〉

第13詩節では〈作品の内容〉の〈適切性〉についての議論がなされる。詩節の内容は次の通りである。

[Aucitya 13]

ucitārthaviśeṣeṇa prabandhārthaḥ prakāśyate |
guṇaprabhāvabhavyena vibhaveneva sajjanaḥ ||

適切な特定の意味が〈作品の内容〉を明瞭なものにする。美德と力に適った威光が善き人〔をその人だとはっきり分かるようにするか〕のように。

Kṣemendra は意味が適切でないが故に〈作品の内容〉が明瞭となっていない例として Bālar 第一幕第39詩節以下の悪魔ラーヴァナとジャナカ王の台詞を挙げる。

[Bālar 1.39]

rāvaṇaḥ —
yat pārvatīhaṭhakacagrahaṇapravīṇe
pāṇau sthitaṃ purabhidaḥ śaradāṃ sahasram |

クシェーメンドラの詩論書に引用されるラージャシェーカーラの詩節について（山崎）

gīrvāṇasāraṇanirmitagātram atra
tan maithilikrayadhanam dhanur āvirastu ||
janakaḥ—
āvirastu samam agarbhasaṃbhavayā sītayā |

ラーヴァナ： パールヴァティーの髪を荒々しく掴むことに慣れている、都城の破壊者（シヴァ）の手に一千年もの間あった弓が、茲に現れんことを。〔その弓は〕神々のほんの僅かな力を基にしてその体が創られたものであり、ミティラーの娘（シーター）を買い取る為の財である。

ジャナカ王： 胎内から誕生したのではないシーターと一緒に現れよ。

以上の例では「シヴァ神の手中にあった弓が茲に現れんことを（pāṇau sthitam purabhidah ... dhanur āvirastu）」という悪魔ラーヴァナの台詞の直後にシーターの育ての親であるジャナカ王の「シーターと一緒に現れよ（āvirastu samaṃ sītayā）」という台詞が後続している。一読するとジャナカ王が恰も自分の娘を悪魔に与えようとしているかのような印象を抱かせる意味内容である。しかしほっそりとした四肢の女が人喰いの悪魔に与えられる筈がないことは読者にとって周知のことであるから、読者の心の中に矛盾を生むことになり不適切であると Kṣemendra は説明する²⁰。

3.3 〈詩的美質〉の〈適切性〉

次に Aucitya 第14詩節に説かれる〈詩的美質〉の〈適切性〉について見てみよう。

[Aucitya 14]
prastutārthocitaḥ kāvyē bhavyaḥ saubhāgyavān guṇaḥ |
syandatīndur ivānandaṃ saṃbhogāvasaroditaḥ ||

カーヴィアでは、魅力を備えた〈詩的美質〉が主題となる事物に適合していなければならない。性愛を享受する時に昇天した月が歓喜を滴らせるように。

以上を補足説明して Kṣemendra は次のように言う。

[Aucitya 121.4-5]
prastutasyārthasyaucityenaujaḥprasādamādharyasaukumāryādilakṣaṇo guṇaḥ kāvyē bhavyaḥ
saubhāgyavattām avāptaḥ sahrdayānandasamdoham indur iva syandati ||

主題となる事物の〈適切性〉によって、〈力強さ〉(ojas) や〈明快〉(prasāda)、〈甘美〉(mādhurya)、〈優美性〉(saukumārya) 等の特徴とする〈詩的美質〉がカーヴィアの中に生まれることになる。魅力を備えた月が情趣を解する者に夥しい歓喜を滴らせるように。

Kṣemendra は主題となる事物が〈詩的美質〉を生み出さない例として Bālar 第五幕第11詩節を挙げる。

[Bālar 5.11]

etasyāḥ smarasaṃjvaraḥ karatalasparśaiḥ parīkṣyo na yaḥ
 snigdhenāpi janena dāhabhayataḥ prasthampacaḥ pāthasām |
 nirvīryīkṛtacandanauśadhavidhau tasmimṣ taḍatkāriṇo
 lājasphoṭam amī sphuṭanti maṇayaḥ sarve 'pi hārasrajām ||

この女（シーター）が愛する人でさえ、延焼を恐れて、一プラスタの水を干上がらせてしまうその情愛の熱を掌で触れて調べてみる事が出来ない。それ（情愛の熱）は梅檀膏や薬を処方しても効力を消してしまうのであるから、〔首に掛けている〕真珠の首飾りのその珠は皆悉くパチパチと炸裂して、からからに干乾びた穀粒のように弾ける。

上掲詩節はラーマとの別離に悲しむシーターを主題としているから〈甘美〉(mādhurya) が〈詩的美質〉として求められるべきであると Kṣemendra は言う。ところが彼によれば、この詩節は〈力強さ〉(ojas) に香り付けられているので〈詩的美質〉が適切ではないという²¹⁾。

ここで Kṣemendra が以上の詩節を「〈力強さ〉によって表示される強い性質に香り付けられている (ojasphūrjitorjitasvabhāvādhivāsītā)」詩節であると述べていることは彼の〈詩的美質〉の定義を知る上で重要である。RAGHAVAN [1963: 269, 275] が指摘するように、Ānandavardhana 以前の詩論家である Bhāmaha と Daṇḍin は〈詩的美質〉に数えられる〈力強さ〉は長い複合語構成に同一もしくはそれに従属するものであると主張する²²⁾。これに対し Ānandavardhana は両者の理論を尊重しつつも、〈力強さ〉は語と意味に依拠して確立されるのであって、意味に依拠する場合は長い複合語構成を必ずしも必要としないという理論を提唱した²³⁾。上掲の Bālar の詩節は c 句を例外として長い複合語構成に依拠しているとは言い難いから、Kṣemendra がこの詩節を〈力強さ〉を表出している詩節として挙げていることは Ānandavardhana が提唱した〈詩的美質〉の定義を Kṣemendra が踏襲していたことの証左となろう。尤も彼が第14詩節に対する説明で Ānandavardhana が〈詩的美質〉に数えていない〈優美性〉を始めとする〔〈詩的美質〉〕(saukumāryādi) を挙げている点には疑問が残るが、これは彼が Ānandavardhana に同じく Bhāmaha らの〈詩的美質〉の定義を完全には排斥していなかったことによるものと見るべきであろう。

3.4 〈修辞〉の〈適切性〉

次の第15詩節では〈修辞〉の〈適切性〉が論じられる。

[Aucitya 15]

arthaucityavatā sūktir alaṃkāreṇa śobhate |
 pīnastanasthiteneva hāreṇa hariṇekṣaṇā ||

〔その主題となる〕事物に対する〈適切性〉を備えた〈修辞〉によって、秀句は光輝を発

クシェーメンドラの詩論書に引用されるラージャシェーカラの詩節について（山崎）

する。豊満な乳房の上にある首飾りによって、鹿のような眼をした女〔が光輝を発するか〕のように。

以上に対する反例として Kṣemendra は以下の Rājaśekhara の詩節を引用する。

citācakraṃ candraḥ kusumadhanuṣo dagdhavapuṣaḥ
kalaṅkaś tatratyaḥ spr̥śati malināṅgāraḥ kalāṅkaḥ |
yad etat sajjotyir daradalitakarpūradhavalāḥ
marudbhir bhasmaitat prasaratī vikīrṇaṃ dīśi dīśi ||

その美しい姿を燃やされてしまった、花の弓を携える者（カーマ）の、円状に積まれた火葬の薪は月である。そこ（火葬の薪という月）にある斑点は黒い炭となっている。光沢を發し、小さく砕かれた樟腦粒のように白いこの灰は、風であちこちに飛散し、諸方へと広がって行く。

上掲詩節ではそれぞれ「月」（candra）、「斑点」（kalaṅka）を比喩基準、「円状に積まれた火葬の薪」（citācakra）、「黒い炭」（malināṅgāra）を比喩対象とする隠喩が用いられている。ところが本来歓喜を与える甘露の雫を滴らせるはずの「月」を「円状に積まれた火葬の薪」に喩えるのは不適切であり、これを避けるべきであると Kṣemendra は説明する²⁴⁾。

3.5 〈情調〉の〈適切性〉

3.5.1 適切な〈情調〉の表出

Aucitya 第16-18詩節は〈情調〉の〈適切性〉の議論に充てられている。Kṣemendra は第16詩節で〈恋情〉（śṛṅgāra）、〈滑稽〉（hāsyā）、〈悲〉（karuṇā）、〈憤怒〉（raudra）、〈勇猛〉（vīra）、〈恐怖〉（bhayānaka）、〈嫌悪〉（bībhatsa）、〈驚異〉（adbhuta）、〈寂靜〉（śānta）という九種の〈情調〉を適切に表出する方法を説明し、第17-18詩節では同一詩節中に複数の〈情調〉を併存させる方法について論じている。第16詩節の内容は次の通りである。

[Aucitya 16]

kurvan sarvāśāye vyāptim aucityaruciro rasaḥ |
madhumāsa ivāśokaṃ karoty aṅkuritaṃ manaḥ ||

〈適切性〉で輝く〈情調〉はあらゆる者の心の中に行き渡り、精神を萌芽させる。春が無憂樹を〔芽吹かせるか〕のように。

Kṣemendra は〈勇猛〉の〈情調〉が適切に表出されている例として以下の出典不明の Rājaśekhara の詩節を引用する。

strīṅgāṃ madhye salīlāṃ bhramitagurugadāghātanirnaṣṭasaṃjñāḥ
sadyo vadhyo 'bhavas tvaṃ paśur iva vivaśas tena rājñārjunena |
tasya cchettāpi yo 'sau sakalanr̥paripur jāmāgnyo bhujānāṃ

jitvoccaiḥ so 'pi yena dvija iti na hatas tāpasas tv eṣa rāmaḥ ||

回した重い棍棒の一撃を受けて、女達の間で安らかに気を失った爾（ラーヴァナ）を、かのアルジュナ王は恰も非力な畜生〔を殺すか〕の如くに、瞬殺することが出来た。全ての王の敵たるあのジャマッドアグニの子孫（斧を持ったラーマ）は彼（アルジュナ）の腕を切り落とす者であったけれども、そしてその彼（斧を持ったラーマ）をも十分に打ち負かしてから、「〔此奴は〕再生族だ。」と考えて殺害しなかったのは実に苦行者たるラーマである。

上掲詩節ではアルジュナ王、斧を持ったラーマ、ラーマという三人の人物が力が劣る者から力が勝る者へというように順序を追って描かれているので、三人の中でラーマが最も卓越した存在であることが表現されていると Kṣemendra は言う²⁵⁾。勇猛さに卓越した三人の人物を弱い者から強い者の順に登場させているので、〈勇猛〉の〈情調〉が適切に表出されている訳である。

3.5.2 複数の〈情調〉が併存する場合の〈適切性〉

第17-18詩節では同一詩節内に複数の〈情調〉が併存する場合の〈適切性〉が議論される。

[Aucitya 17-18]

yathā madhuratiktādyā rasāḥ kuśalajoyitāḥ |
vicitrāsvādatām yānti śṛṅgārādyās tathā mithaḥ ||
teṣāṃ parasparāśleṣāt kuryād aucityarakṣaṇam |
anaucityena saṃsprṣṭāḥ kasyeṣṭo rasasaṃkaraḥ ||

丁度甘さや苦さ等の諸々の味 (rasa) が腕の良い〔調理〕人によって〔調味料や飲料等と〕結び付けられると、様々な風味を持つものになるように、〈恋情〉等〔の諸々の〈情調〉〕は互いに〔両立し合う〕。それら (〈情調〉) は相互に重なり合うものであるから、〈適切性〉を遵守すべきである。〈不適切性〉と組み合わせさせた〈情調〉の混交を誰が欲しようか²⁶⁾。

この箇所ではなされる議論はこれまでの〈適切性〉の議論とは一線を画し、Ānandavardhana が *Dhvanyāloka* 第三章第21-31詩節以下で議論する内容を前提に、それを補足する内容である²⁷⁾。

Kṣemendra 自身は〈情調〉が適切に併存する条件を理論立てて明確に述べていないが、彼が提示する例示詩節の内容とそれに対する説明から条件を帰納すると、それは次のように要約される。

- (1) 相矛盾する二つの〈情調〉が併存していても、従属する〈情調〉が主要な〈情調〉を助長する目的で用いられていれば問題はない。
- (2) 相矛盾する二つの〈情調〉が併存していても、台詞の語り手の性格や特定の語から、何れの〈情調〉が主要であるか判断できる場合は、矛盾する〈情調〉は等価であってもよい。
- (3) 上記以外では、相矛盾する二つの〈情調〉が併存する場合、従属的な〈情調〉が主要な〈情調〉に勝ってはならない。
- (4) 三つ以上の〈情調〉が併存する場合、その中で主要な〈情調〉が残余の〈情調〉によ

クシェーメンドラの詩論書に引用されるラージャシェーカーラの詩節について（山崎）

て助長されねばならない。

四つの条件のうち (1) と (3) は *Dhvanyāloka* においても議論されている。事実 Kṣemendra は (3) の反例を示した後で *Dhvanyāloka* 第三章第24詩節を引用する。

[*Dhvanyāloka* 3.24]

virodhī vāvirodhī vā raso 'ṅgini rasāntare |
pariṣaṃ na netavyas tena syād avirodhitā ||

〈情調〉(X) が矛盾するものであれ、矛盾しないものであれ、主要な別の〈情調〉(Y) がある場合、〔〈情調〉(X) を〕増長させてはならない。それによって矛盾はあり得ないことになる。

以上の *Dhvanyāloka* の定義に基づく条件 (3) に従って〈恋情〉(śṛṅgāra) と〈寂靜〉(śānta) という二種の相反する〈情調〉が適切に併存している例として Kṣemendra が引用するのが *Karpūramañjarī* 第一幕第18詩節である。

[Karp 1.18]

māṇaṃ muṃcadha deha vallahajāṇe ditṭhiṃ taramguttaram
tāruṇṇaṃ diahāiṃ paṃca daha vā pīṇatṭhaṇatṭhaṃbhaṇaṃ |
itthaṃ koilimaṃjusimṃjīṇamisād devassa paṃcesuṇo
diṇṇā cittamahūsaveṇa sahasā āṇabba sabbamkasā ||

「憾みを捨てよ。愛しい人にきよろきよろと動く眼差しを投げ掛けよ。若さは五日かもしくは十日の間、豊かな乳房をはりのあるものするのだ。」恰もこのように、チャイトラ月の乱痴気騒ぎは、五本の矢を持つ神（カーマ）の命令をコーキラ鳥の愛らしいチュンチュンという囁りに形を変えて突然に下しているかのようです。ありとあらゆるものを従わせる〔その命令を〕。

Kṣemendra によると上掲詩節の主要な〈情調〉は〈恋情〉である。これに対し b 句の「若さが存するのは五日かもしくは十日の間なのだ」(tāruṇṇaṃ diahāiṃ paṃca daha vā) という箇所は無常を本質とする〈寂靜〉をその〈情調〉としている。従って上掲詩節では主要な〈情調〉である〈恋情〉と従属的な〈情調〉である〈寂靜〉という相矛盾する二つの〈情調〉が併存することになる。しかし後者は「〈情調〉の滴」(rasabindu) であり主要な情調である〈恋情〉を凌駕してしまうことにはならないから、矛盾する〈情調〉の適切な併存たりうると Kṣemendra は説明する²⁸⁾。

3.6 〈行為実現要素〉の〈適切性〉

Aucitya 第19詩節から25詩節までは〈行為〉、〈行為実現要素〉、〈性〉、〈数〉、〈限定要素〉、〈前接辞〉、〈既成形〉についての七つの〈適切性〉が議論される。術語が並ぶだけに一見すると文法

学的議論がなされるように思われるが、取り上げる内容は至って実践的のものである。彼は〈行為実現要素〉の〈適切性〉を議論するに当たり Bālar 第二幕第20詩節を不適切な例として引用する。

[Aucitya 20]

sānvayaṃ śobhate vākyam ucitair eva kārakaiḥ |
kulābharāṇam aiśvaryaṃ audāryacaritair iva ||

統語関係のある文は、実に適切な〈行為実現要素〉によって光輝を発する。誉れ高き血統をその飾りとする権力が、度量の広さから生まれる行いで〔光輝を発するか〕のように。

[Bālar 2.20]

paulastyāḥ praṇayena yācata iti śrutvā mano modate
deyo naiṣa haraprasādaparaśus tenādhikaṃ tāmtyati |
tad vācyāḥ sa daśānana mama girā dattā dvijebhyo mahī
tubhyaṃ brūhi rasātalatridivayor nirjitya kiṃ dīyatām ||

プラスティの子孫（ラーヴァナ）が懇意的に〔斧を〕所望していると聞いて、〔私の〕心は歓喜に沸いている。シヴァの恩恵によって〔授けられた〕この斧を渡すことは出来ない。それ故一層彼は悩み込むだろう。故に〔爾は〕私の言葉を以て十の顔を持つ彼に申し伝えよ。「大地は再生族達に与えてしまった。さあ語れ、地獄界と天界の何れを〔私は〕征服し、爾に与えればよいかを。」

以上の詩節中で「与える」という行為の実現要素は次の通りである。

行為主体 (kartṛ) : バールガヴァの聖者 (bhārgava)

目的 (karman) : 地獄界と天界のいずれか (talatridivayor kim)

受け手 (sampradāna) : プラスティの子孫 (paulastyā)

Kṣemendraによれば、バールガヴァの聖者は「人々を利益することに勤しむ者」(lokahitapravṛtta)であり、一方の悪魔ラーヴァナは「三界の厄介者」(trailokyakaṇṭaka)に等しい存在である。従って「バールガヴァが世界をラーヴァナに与える」という内容は「与える」という行為の主体と目的、受け手の関係から判断して不適切であると彼は説明する²⁹⁾。

3.7 〈場所〉の〈適切性〉

第27詩節で議論されるのは〈場所〉の適切性である。

[Aucitya 27]

deśaucityena kāvyārthaḥ saśaṃvādena śobhate |
paraṃ paricayāśaṃṣī vyavahāraḥ satām iva |

〔鑑賞者の心に〕じっくり来る、〈場所〉の〈適切性〉によってカーヴィアの主題はとても美しく見える。善き人達の振る舞いが〔彼等の〕身についていることを物語るように。

クシェーメンドラの詩論書に引用されるラージャシェーカラの詩節について（山崎）

以上に適合しない詩節として以下の Rājaśekhara の詩節が Kṣemendra によって挙げられる。

karṇāṭḍaśanānkitaḥ śitamahārāṣṭrikāṭākṣāhataḥ
praudhāndhrīstanapīḍitaḥ praṇayinībhrūbhaṅgavitrāsitaḥ |
lāṭībāhuveṣṭitaś ca malayastrītarjanītarjitaḥ
so 'yaṃ samprati rājaśekharakavir vārāṇasīm vāñcchati ||

カルナータの女に噛み傷を付けられ、色白のマハーラーシュトラの女の流し目に打たれて、
尊大なアーンドラの女の乳房に押し潰されて、妻の鬢め面にぞっとさせられて、ラータの女
の腕に巻き付かれて、そしてマラヤの女の人差し指に威嚇されたので、茲にいるかの詩人ラー
ジャシェーカラは今、ヴァーラーナシーを望んでいる。

Kṣemendra によると、以上の詩節では南方地方の様々な場所が〈恋情〉の〈情調〉を表出する
美しい女と結び付けられているという。しかしこの一連の場所説明の中間に場所を示唆しない
「妻」(praṇayinī) という語が介在している為に、場所の〈適切性〉が完全なものになっていない
と彼は指摘する³⁰⁾。

3.8 〈状態〉の〈適切性〉

Kṣemendra が Rājaśekhara の作品から最後に引用するのは、次の〈状態〉の〈適切性〉の説明
においてである。

[Aucitya 36]
avasthocitam ādhatte kāvyam jagati pūjyatām |
vicāryamāṇaruciraṃ kartavyam iva dhīmatām ||

〈状態〉について適切なカーヴィアは世間で尊厳を得る。聡明な者達が果たし得るものは
熟慮されていて輝かしく〔世間で尊厳を得る〕ように。

第27詩節の例に同じく、ここで引用される Bālar 第四幕第一詩節も不適切な例と見做されるも
のである。

[Bālar 4.1]
jyāyān dhanvī navadhṛtadhanustāmrahasodareṇa
kṣatrakṣodavyatikarapaṭus tāṭakātādakena |
karṇābhyarṇasphuritapalitaḥ kṣīrakaṇṭhena sārḍham
yodddhum vācchan na katham amunā lajjate jāmadagnyaḥ ||

弓を携えたジャマッドアグニの末裔が、俄に手にした弓でその掌の内を赤く染め、喉に乳
を含んでいる、タータカーの殺害者である彼（ラーマ）と一緒に干戈を交えようと望むのは、
如何して恥ずべきでないことであろうか。〔そのジャマッドアグニの末裔は〕 武士族を完全
に繰り返し粉碎することが出来、耳元には白髪がはっきりと現れた強大な者であるのだから。

以上の詩節でラーマは手にした弓で「掌の内を赤く染めた」(tāmrahastodara)、「喉に乳を含んでいる」(kṣīraṅṅaṅṅa) 華奢な「幼児」(śīśu) として描かれている。ところが Rājaśekhara がラーマに用いている添え名である「タータカーの殺害者」(tāṭakātādaka) は華奢とは相容れないものであるから、この添え名はラーマの〈状態〉に不適切であると Kṣemendra は説明する³¹⁾。

4 結語

以上 Aucitya に引用された Rājaśekhara の詩節を基に Kṣemendra が Aucitya において説明する〈適切性〉について概観した。極めて限定的にはあるが、これらの諸例から読み取ることの出来る Kṣemendra の〈適切性〉の性格は次の如くに要約されよう。

- 主題物ないしは主人公を特徴付ける諸要素（例えば、添え名や形容句、比喩の基準となるもの）は文脈や一般見解に照らして主題物ないしは主人公の特徴や性格、置かれている状況に全て適合していなければならない。
- 〈情調〉は一貫性を欠いても不適切とは見做されないが、Ānandavardhana が提示する条件の他に二つの条件、すなわち (1) 相矛盾する二つの情調の何れが主要な情調か文脈から判断できる、(2) 複数の情調が主要な情調を助長する、の何れかが守られていなければならない。

また以上から Kṣemendra の詩論家としての態度について次のことが指摘できよう。

- Aucitya 第14詩節の例示詩節として引用される Rājaśekhara の詩節の性格から判断して Kṣemendra の〈詩的美質〉理解は Ānandavardhana のそれを踏襲している。しかし彼が第14詩節に対する自註で Ānandavardhana が認める三種の〈詩的美質〉に加えて〈繊細さ〉を始めとする〈詩的美質〉も認めていることは、Kṣemendra が Ānandavardhana 以前の詩論家の定義する〈詩的美質〉を排斥する排他的な態度をとっていなかったことを示唆する。

Kṣemendra の〈適切性〉及び〈情調〉理論については Suvṛ 第三章「韻律の適用に関する章」(vṛttavinīyoga)、〈詩的美質〉に関する理論については *Kavikaṅṅhābharāṅṅa* 第四章「詩的美質と詩的欠陥に関する節」(guṅṅadoṣavibhāga) も併せて検討する必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

- INGALLS, D. H. H., J. M. MASSON and M. V. PATWARDHAN 1990 *The Dhvanyāloka of Ānandavardhana*. Cambridge: HUP. JACOBI, H. 1902 “Ānandavardhana’s Dhvanyāloka,” *ZDMG* 56, pp. 392-410. KONOW, Sten and C. R. LANMAN 1901 *Rājaśekhara’s Karpūra-māñjarī*. Cambridge: HUP. RAGHAVAN, V. 1963 *Bhoja’s Śṛṅgāra Prakāśa*. Madras: Punarvasu. — 1973 *Studies on Some Concepts of the Alaṅkāra Śāstra*. Madras: The Adyar Library and Research Centre. STRAUBE, M. 2006 *Prinz Sudhana und die Kinnarī*. Marburg: IndTib Verlag. SŪRYAKĀNTA 1954 *Kṣemendra Studies*. Poona:

Oriental Book Agency. WILSON, Frances 1980 “Notes on the Text-critical Editing of the *Bodhisattvāvadānakalpalatā*,” *JIAS* 3-1, pp. 111-114. 上村勝彦 1999 『インド古典詩論研究—アーナンダヴァルダナの dhvani理論—』 東京：東京大学出版会

¹⁾ KONOW and LANMAN [1901: 177-180] は Rājaśekhara が10世紀頃に生きていたと推定される根拠として次の三点を挙げる。(1) Rājaśekhara は現存する自身の四戯曲の全ての中で自らが Mahendrapāla 王の師であったと述べている。(2) Mahendrapāla の息子は Āryāvarta の大君主 Mahīpāla であった。Mahīpāla 王の名前は西暦917年の日付のある Asni 碑文に見られる。(3) Pracand には同戯曲がマホーダヤ（カナウジ）で上演されたことが記されている。Mahendrapāla、Mahīpāla 父子がカナウジを領有していたことは Siyadoni 碑文に裏付けられるので Mahendrapāla の年代は903-4年か907-8年となる。

²⁾ 本論で引用するテキストと詩節番号、頁行数は DURGĀPRASĀDA と PĀṆDURANG PARAB によって1886年に出版されたボンベイ本のものである。

³⁾ これについては INGALLS et al. [1990] が挙げる *Śakuntala* の例が参考になろう。同作品は *Mahābhārata* の挿話を材源としたものであるが、後者は指輪モチーフを欠く点で前者と内容を異にする。INGALLS et al. [1990: 21] は、主人公 Duśyanta 王が無慈悲さ故に *Śakuntalā* を捨てるという叙事詩の内容はカーヴィアが要求する主人公の気高き性格と適合しないが故に、それに代わるものとして Kālidāsa が指輪の物語を創作したと推定する。

⁴⁾ *Avadānakalpalatā* 第64章からの詩節引用については STRAUBE [2006: 208-209] を参照されたい。

⁵⁾ Aucitya *4-5: śrīratnasimhe suhr̥dī prayāte śārvaṃ puram̐ śrīvijayeśarājñi |

tadātmajasyodayasimhanāmnaḥ kṛte kṛtas tena girām vicārah || yasyāsiḥ parivārakṛt

tribhuvanaprakhyātaśīlaśruteḥ sarvasyāvanatena yena nitarām prāptā viśeṣonnatih | āśaḥ śītalatām

nayaty aviratam̐ yasya pratāpānalas tasya śrīmadanantarājanr̥pateḥ kāle kilāyam̐ kṛtaḥ ||

（「吉祥なる Ratnasimha という友人が、吉祥なる Vijayeśa という王の〔治〕下にある Śārva という都に発ったので、Udayasimha という名の彼の息子の為に、彼は言葉の論考を行った。その御方は〔自らの〕

善い性質と学問知識が三界に広く聞こえており、彼の携える剣は〔敵を〕取り巻きに変える。その御方はありとあらゆる者達に恭順であり、傑出した繁栄を遍く実現した。その御方の威光の火は諸方を絶えず安穩になす。その吉祥なるアナンタ王という人民の主の〔治める〕、まさにその

時代にこの〔Aucitya が〕著された。〕

⁶⁾ 〈語〉(pada)、〈文〉(vākya)、〈作品の内容〉(prabandhārtha)、〈詩的美質〉(guṇa)、〈修辞〉(alaṃkāra)、〈情調〉(rasa)、〈行為〉(kriyā)、〈行為実現要素〉(kāraṇa)、〈性〉(liṅga)、〈数〉(vacana)、〈限定要素〉(viśeṣaṇa)、〈前接辞〉(upasarga)、〈既成形〉(nipāta)、〈時〉(kāla)、〈場所〉(deśa)、〈系譜〉(kula)、〈誓戒〉(vrata)、〈真実〉(tattva)、〈優れた性質〉(sattva)、〈目的〉(abhiprāya)、

〈本性〉(svabhāva)、〈本質の要約〉(sārasaṅgraha)、〈閃き〉(pratibhā)、〈状態〉(avasthā)、〈考察〉(vicāra)、〈名前〉(nāman)、〈祈願〉(āsis)に関する〈適切性〉。

⁷⁾ Aucitya 7: ucitaṃ prāhur ācāryāḥ sadṛśaṃ kila yasya yat | ucitasya ca yo bhāvas tad aucityaṃ pracakṣate || (「或るものに適切なもの、〔それを〕「適切なもの」と師達は言うそうである。そして〔その〕適切なものの性質、それを〈適切性〉と呼ぶ。)」

⁸⁾ Aucitya 3-5: aucityasya camatkāraḥcārīṇaś cārucarvaṇe | rasaḥjīvitabhūtasya vicāraṃ kurute 'dhunā || kāvyasyālam alaṃkāraiḥ kiṃ mithyāgaṇitair guṇaiḥ | yasya jīvitam aucityaṃ vicintyāpi na dṛśyate || alaṃkāraś tv alaṃkāra guṇā eva guṇāḥ sadā | aucityaṃ rāsasiddhasya sthiraṃ kāvyasya jīvitam ||

⁹⁾ Aucitya 115.13-19: parasparopakāraḥcaruciraśabdārtharūpasya kāvyasyopamotprekṣādāyo ye pracurālaṃkāraś te kaṭakakuṇḍalakeyūrahārādivad alaṃkāra eva, bāhyaśobhāhetutvāt | ye 'pi kāvyaguṇāḥ kecana tallakṣaṇavicakṣaṇaiḥ samāmnātās te 'pi śrutasatyāśīlādivad guṇā eva, āhāryatvāt | aucityaṃ tv agre vakṣyamāṇalakṣaṇam sthiraṃ avinaśvaram jīvitam kāvyasya, tena vināsyā guṇālaṃkārayuktasyāpi nirjīvatvāt | rasena śṛṅgārādinā siddhasya prasiddhasya kāvyasya dhātuvādarasasiddhasyeva taj jīvitam sthiraṃ ity arthaḥ |

¹⁰⁾ *Dhvanyāloka* の韻文部の作者については、これを Ānandavardhana と別人物であるとする説と、同一人物であるとする説がある。しかし双方の説を直接証明する証拠がない為に未だ議論の決着を見ていない。JACOBI [1902] を始めとする初期の研究者は別人物説をとったが、INGALLS et al. [1990] は同一人物説を有力視する。両者が自説の根拠とする点については JACOBI [1902: 405-406]、INGALLS et al. [1990: 26-27] を参照されたい。本論では暫定的に同一人物説をとり韻文部と注釈双方を *Dhvanyāloka* の呼称を用いて指すこととする。

¹¹⁾ *Dhvanyāloka* 2.7: tam artham avalambante ye 'ṅginam te guṇāḥ smṛtāḥ | aṅgāśrītās tv alaṃkāra mantavyāḥ kaṭakādivat || (詩節番号、頁行数はボンベイ本 (Ed. DURGĀPRASĀDA and PAṆŚIKAR, Bombay: NSP, 1851) のものである)

¹²⁾ *Locana* 75.5-6: tathā hy acetanaṃ śaśaśarīraṃ kuṇḍalādyupetaṃ api na bhāti | alaṃkāryasyābhāvāt | yatiśarīraṃ kaṭakādiyuktaṃ hāsyāvahaṃ bhavati | alaṃkāryasyānaucityāt |

¹³⁾ *Locana* 13.15-16: ucitāśabdena rasaviśayam evaucityaṃ bhavatīti darśayan rasadhvaner jīvitvaṃ sūcayati | tadabhāve hi kimapekṣayedam aucityaṃ nāma sarvatroddhoṣyata iti bhāvaḥ |

¹⁴⁾ Kṣemendra は Aucitya において Abhinavagupta が詩の命と見做す〈暗示〉について終始沈黙している。しかし RAGHAVAN [1973: 270] は、Aucitya 全体を通して Kṣemendra の〈適切性〉の説明は〈暗示〉の原理に正確に基づいていたと見るに十分であり、そのことは明らかであるとして次の例を根拠に挙げる。すなわち Kṣemendra は〈語〉の適切性を示す為に *Ratnāvalī* 第二幕第11詩節を引用し、それを評して virahāvasthāsūcakam 'kṛśāṅgyāḥ' iti padaṃ paramam aucityaṃ puṣṇāti (「別離の状態を示唆する、『肢体がやつれた女の』という語が最高の〈適切性〉を増長さ

せている。」Aucitya 118.3-4) と述べている。この説明は愛人との別離の状態とその結果としての苦しみ、すなわち〈添えない恋〉(vipralambha) の〈情調〉を「示唆する」ものである。

¹⁵⁾ Kṣemendra が Abhinavagupta から詩学を学んだことは *Bṛhatkathamañjarī* 19.37 及び *Bhāratamañjarī* 19.*8 から知られる。śrutvābhinavaguptākhyāt sāhityaṃ bodhavāridheḥ | ācāryaśekharamaṇir vidyāvivṛtikāriṇaḥ || (「〔彼は〕師の冠の宝珠であった。〔彼は〕学問の女神を顕現させるアビナヴァグプタという名の知識の大海から修辞学を学び、」)

¹⁶⁾ Suvṛ 3.35: śārdūlakṛīḍitair eva prakhyāto rājaśekharaḥ | śikharīva paraṃ vakraiḥ (lies: vaktraiḥ?) sollekhaire uccaśekharaḥ || (「Rājaśekhara は実に śārdūlavikṛīḍita を以てその名を広く知られている。高い頂を持つ尖峰が、はっきりとした〔鋭い山の〕先端のお蔭で殊の外〔その名を広く知られる〕ように。」)

¹⁷⁾ Aucitya 119.3-4: atrāpi candramasaḥ śṛṅgārāntaraṅgair anaṅgoddīpanaiḥ padair nirvartito vākyārthaḥ sadarthaucityasāmarthyenātyartham arthanīyatām prāptaḥ | (「ここ〔に挙げた詩〕でも、月に関する、恋情を含んだ、愛欲を掻き立てる諸々の語がもたらす文意が、問題となっている事物(月)と適合している効力に基づいて、非常に望ましいものとなっている。」)

¹⁸⁾ CAPPELLER 本の b 句冒頭部の読みは śaśvatvarga- であるが、寧ろボンベイ本と Aucitya が呈示する読み śaśvatkhaḍga- をとるべきであろう。しかしこの一連の複合語の解釈が容易でない。SŪRYAKĀNTA [1954: 122] は当該箇所を「蛇」(bhujamga) と「剣」(khaḍga)、「白檀木」(candanataru) と「腕」(dos) を比喩基準と比喩対象とする隠喩として “an eternal sandal tree for the snake in the form of sword” と解釈する。しかし蛇を剣に喩えるのはやや奇妙である。また「永遠なる」(śaśvat) 白檀木の意味する所も若干不明瞭である。寧ろ śaśvatkhaḍga- を「絶えず剣を携行する者」という所有複合語に解し、bhujamga を “lover”, “companion” の意味にとって、全体を「絶えず剣を携行する者である〔自らの〕伴侶にとって〔楽をもたらす〕白檀木である〔ドゥルヨーダナの腕〕」と解釈すべきではないか。

¹⁹⁾ Aucitya 119.10-11: atrāṭīśayaparakaśasotkarṣasubhaṭabhujaṣṭambhāyāsamucitena kuvalayanālatulādhiropāṇena vākyārthaḥ sopahāsatayeva nibaddhaḥ pariñāyate || (「ここ〔に挙げた詩節〕では、抜群に堅固で且つ卓越した戦士の柱のような腕に、不適切な睡蓮の茎との類似性が付託されることで、文の意味が恰も滑稽さで覆い隠されてしまっているかのように理解される。」)

²⁰⁾ Aucitya 120.17-20: atra ‘āvirastu samam sītayā’ iti janakarājena yad ucyate tenāsya piśitāśāyā tanayāpratipādanam abhimatam ivopalakṣyate | na caitad vidmaḥ kathaṃ bhakṣyabhūtā kusumakomalāṅgī puruṣādāya pratipādyate | ity anaucityena prasiddhena vṛttavaiparītyaṃ paraṃ hrdayaviśamvādam ādadhāti | (「ここ〔に挙げた詩〕では、『シーターと同時に現れよ』とジャナカ王が述べていることで、この者の望みが人喰鬼に娘を与えることであるかの如く示唆されている。しかしこのように〔我々は〕理解しない。花のようにほっそりとした四肢をした女が食物の

如くに人喰いに与えられることが如何してあろうか」という、周知の〈非適切性〉によって出来事の矛盾が心の中に最高の不調和を与えている。〕)

²¹⁾ Aucitya 122.13-15: atra virahavidhuraramaṇīmanobhavāvasthānurūpaṃ mādhyam utsrjya taḍatkāriṇo lājasphoṭaṃ sphuṭantīty ojaṣphūrjitorjitasvabhāvādhivāsītā sūktir lāvanyapeśalatanur lalitalalaneva paruṣabhāṣiṇī jhaṭīty anaucityaṃ cetasi saṃcārayati || (「ここ〔に挙げた例〕では、秀句が、別離で心沈んでいる妻の情愛の状態に適合した〈甘美〉を捨てて、『〔珠は〕パチパチと炸裂して、からからに干乾びた穀粒のように弾ける』という、〈力強さ〉によって表出されている強い本性に香り付けられているので、恰も美しさ故に愛すべき体をしているのに、粗野な言葉を発する色っぽい女のように、忽ち〈非適切性〉を心の中に行き渡らせる。〕)

²²⁾ Bhāmaha と Daṇḍin が主張する所はほぼ同じである。但し後者が地域性に基づいて文体をヴァイダルビーとガウディーの二種に分け、〈力強さ〉を説明するのに対し、前者は文体の地域性を無視して〈力強さ〉を説明する点に相違がある。Kāvyaḷamkāra 2.2: kecid ojaḥ bhidhitsantaḥ samasyanti bahūny api | yathā mandārakusumareṇupīṅjaritālakā || (「或る者達は〈力強さ〉を表現しようとして沢山〔の語〕さえも複合する。例えば『マンダーラ樹の花粉で巻髪が黄色くなった女』というように。〕) Kāvyaḍarśa 1.80: ojaḥ samāśabhūyastvam etad gadyasya jīvitam | padye 'py adākṣiṇātyānām idam ekaṃ parāyaṇam || (「〈力強さ〉〔という〈詩的美質〉〕は複合語に富んでいることである。これ(複合語に富んでいることを本質とする〈力強さ〉)は散文の命である。ガウダの人々にとっては、韻文についても、これが唯一の拠り所である。〕) (詩節番号はそれぞれ TRIVEDĪ (Bombay: Government Central Press, 1909)、BÖHTLINGK (Leipzig: Verlag von H. Haessel, 1890) のテキストに基づく)。Vāmana (九世紀)の Kāvyaḷamkārasūtra 3.1.5及び3.2.2には〈詩的美質〉を〈修辞〉から切り離す見解の萌芽が認められる。Vāmana によれば〈詩的美質〉は一つの種類の文体や一人の詩人を特徴付ける特徴ではなく、優れた詩が持っているなければならない必須のものである。彼は Daṇḍin が挙げる10種の〈詩的美質〉を〈語〉と〈意味〉の領域に適用し〈力強さ〉を次のように定義する。Kāvyaḷamkārasūtra 3.1.5: gāḍhatvam ojaḥ || (「〈力強さ〉とは〔構文の〕まとまりが取れていることである。〕) do. 3.2.2: arthasya prauḍhir ojaḥ || (「〈力強さ〉とは、意味が円熟していることである。〕) (スートラ番号、自註の頁数行数は CAPPELLER のテキスト (Jena: Verlag von Hermann Duffet, 1875) に基づく)。Vāmana は〈詩的美質〉を文体に関連付けて説明する。彼の理論に従えば完璧な文体すなわちヴァイダルビー一体であり、〈語〉と〈意味〉の領域にそれぞれ10種の〈詩的美質〉を完全且つ明瞭に備えたものである。この10種の〈詩的美質〉のうち〈力強さ〉と〈美しさ〉が強調されるとガウディー一体となり、〈甘美さ〉と〈繊細さ〉が強調されるとパンチャーリー一体となる。但し〈語〉と〈意味〉の〈力強さ〉を特徴付ける「まとまりがとれていること」(gāḍhatva)、「円熟していること」(prauḍhi) について Vāmana は例示詩節を挙げるのみであり、これらを体系立てて具体的に説明してはいない。Bhāmaha と

Daṇḍin, Vāmana の〈詩的美質〉理解の委細については RAGHAVAN [1963: 268-287] を参照されたい。

²³⁾ *Dhvanyāloka* 2.10: raudrādayo rasā dīptyā lakṣyante kāvyavartinah | tadvyaktihetū śabdārthāh āśrityaujo vyavasthitam || (「カーヴィアに存する、〈憤怒〉を始めとする諸々の〈情調〉は〈輝き出ること〉によって間接的に表示される。それ（〈輝き出ること〉）が顕現する原因である語と意味とに依拠して〈力強さ〉は確立される。）」 *do.* 81.1: tatprakāśanaparaś cārtho 'napekṣitadīrghasamāsaracanaḥ prasannavācakābhidheyah | (「そしてそれ（〈輝き出ること〉）を専ら顕現させる意味は、長い複合語構成を期待しなくとも、明瞭な〈表現〉を用いて表示され得る。）」

²⁴⁾ Aucitya 124.1-3: atrāpy ānandisudhāvasyandasundarasyendoś citācakatvam anucitayatā karnakaṭukam ātaṅkam ivātanoti | yo 'rthas tu hṛdayasaṃvādī sa yady anaucityasparśaleśarahitas tad adhikatarām alaṃkārasobhāṃ puṣṇāti || (「ここ〔に挙げた詩〕でも、歓喜を与える甘露の滴りで心をうっとりさせるとさせる月が円状に積まれた火葬の薪であることは、〈非適切性〉故に、恰も苦痛〔を与えるか〕のように、耳への不快感を与える。しかし心にしっくりと来る事物というものは、仮に〈非適切性〉とほんの僅かでも触れ合うことがなければ、〈修辞〉の一層優れた美を増長させる。）」

²⁵⁾ Aucitya 128.8-9: atra rāvaṇakārtavīryajāmadagnyotkarṣotkarṣatarasopānaparamparādhirohaṇakrameṇa pradhānanāyakasya pratāpaḥ parāṃ koṭim āropitaḥ | (「ここ〔に挙げた詩〕では、ラーヴァナ〔の卓越性に対する一層の卓越性〕とクリタヴィールヤの息子（アルジュナ）〔の卓越性に対する一層の卓越性〕とジャマッドアグニの子孫（斧を持ったラーマ）の卓越性に対する一層の卓越性が一続きの階段のように上昇していく順序が、主要な主人公の力を最高点に押し上げている。）」

²⁶⁾ Aucitya 132.3-6: rasāḥ kaṭukamadhurāmlalavaṇādyāḥ kuśalasūdena vesavārapānādiṣu yojitā vicitrāsvādātām upayānti tathaiva parasparam aviruddhāḥ śṛṅgārādaya iti | teṣāṃ anyonyam aṅgāṅgibhāvayojanāyām aucityasya jīvitasarvasvabhūtasya rakṣāṃ kuryāt | anaucityarajasā rasasaṃyogaḥ sprṣto na kasyacid abhimata ity arthaḥ | (「苦さや甘さ、酸っぱさ、塩辛さ等の諸々の味 (rasa) は、腕の良い調理人によって調味料や飲料等と結び付けられると、様々な風味を持つものになる。全く同じように〈恋情〉等〔の諸々の〈情調〉(rasa)〕は矛盾し合うものではないという〔意味である〕。それら（〈情調〉）が相互に従属要素と主要素の関係で結び付く場合、命であり、あらゆるものに存する〈適切性〉を遵守すべきである。〈不適切性〉という埃に触れてしまった〈情調〉（樹液）の組み合わせを如何なる者も欲したりはしないという意味である。）」

²⁷⁾ *Dhvanyāloka* の該当箇所における議論については上村 [1999: 195-200] を参照されたい。

²⁸⁾ Aucitya 134.20-135.1: iti vākye mukhyaḥ śṛṅgāraraśaḥ prārambhaparyantavyāptiśālī katipayadivasasthāyī yauvanam ity anityatārūpaśāntarasabindunā madhyavruḍiteneva virasatām na nītaḥ | viruddhasya paripoṣābhāvāt | viruddhavarṇanoditena hy anaucityena sthāyī kuñjara iva śvabhṛpātitaḥ punar utthātum notsahata ity alaṃ vistareṇa | (「以上の文において、主要素である〈恋

情)という〈情調〉は〔詩の〕冒頭から終わりまで遍満しているが、恰も中間に沈められているかのような、『数日の間存在する若さ』という無常を本質とする〈寂靜〉という〈情調〉の滴によって、味わいのないものにはならない。相反する〔〈情調〉〕を増長させることがないから。実に相反する〔〈情調〉を〕詳しく描くことから生まれる〈不適切性〉によって〈基本的感情〉は、丁度穴に落とされた象の如くに、二度とは姿を現すことがない。以上のことは詳述するまでもない。〕)

²⁹⁾ Aucitya 138.24-139.2: atra rāvaṇadūtena paraśuṃ yācito bhārgavo brūte — ‘naiṣa haraprasādalabdhaḥ paraśur dānayogyah | tat tasmād asmadvacasā sa daśagrīvo vācyaḥ, pṛthvī mayā kaśyapāya pratipādītā | tubhyaṃ pātālatridivayor madhyāt kiṃ nirjitya dīyatām’ ity anucitaṃ muner lokahitapravṛttasya trailokyakaṇṭakabhūtāya rākṣasāya bhuvanapratipādanam | (「ラーヴァナの使者から斧を所望されたパールガヴァは言う。『シヴァの恩恵により獲得されたこの斧を与えることは出来ない。それ故今、私の言葉を以てかの十の首を持つ者（ラーヴァナ）に述べよ。『私は大地をカシュヤパに与えてしまった。爾には地獄界と天界のうち何れを征服した後、与えたらよいか』と。』』という、ここ〔に挙げた詩〕で、人々を利益することに勤しむ聖者が、三界の厄介者に等しい悪魔に世界を与えるのは適切ではない。〕)

³⁰⁾ Aucitya 148.9-13: atra karṇātamahārāṣṭrāndhralāṭamalalayalalanāsambhogasubhagaḥ kālena galitarāgamohaḥ samprati rājaśekharakavir vārāṇasīm gantum icchatīty ukte śṛṅgārarasataramgitavarāṅganāprasāṅge ’naṅganirargaladakṣīnāpathadeśoddeśamadhye praṇayinībhṛbhāṅgavitrāsita iti deśopalakṣaṇavirahitakevalapraṇayinīpadena deśaucityam upacitam apy anucitatām nītam || (「ここ〔に挙げた詩〕では『カルナータ、マハーラーシュトラ、アーンドラ、ラータ、マラヤの女を享受する幸運に恵まれていたけれども、時が経って、色欲から生まれる迷妄がなくなったので、詩人ラージャシェーカーは今、ヴァーラーナシーへ行くことを望んでいる』』というように、〈恋情〉という〈情調〉で心揺れる美しい女との結び付きが述べられているのに、性愛を阻む女のいない南方地方の場所説明の中間にある『妻の顰め面にぞっとさせられ』という、場所の示唆を欠いた、単なる『妻』という語のせい、場所の〈適切性〉はそろっているのに、〈非適切性〉がもたらされている。〕)

³¹⁾ Aucitya 156.14-19: atra bhārgavaḥ sthavirāvasthāsthitaḥ sthitaraparākramakarkaśapraudho dhanurdharaḥ śīśunā rāmeṇa dhanurgraḥaṇārūṇitakomalakarakamalalalena kṣatriyakṣayasambrambhapragalbhā tātākātāḍakena sphuradākarnāpalitaḥ sambhāvyamānananīstanakṣīrakaṇṭhenāmūnā yuyutsuḥ katham na lajjata ity ukte peśalatayā rāghavāvasthāyām jāmadagnyāvasthāviparītāyām pratipādyamānāyām tātākātāḍakeneti viruddhādhivāso ’rthaḥ kim apy anaucityena cetasi samkocam ādadhāti || (「ここ〔に挙げた詩〕では、『老人たる状態にあるブリグの子孫は、耳に達したその白髪がはっきりと現れており、弛まざる進軍によって荒々しく且つ自負に満ちており、武士族の

滅亡を熱望するが故に活力漲る者であるのに、〔その彼が〕弓を携え、弓を掴んでその蓮瓣のような華奢な手の掌が赤く染まった、〔母親から〕与えられている、母親の乳房から出る乳をその喉に含んだこの幼児ラーマ、すなわちタータカーの殺害者と戦おうとするのは、どうして恥ずべきことでないことがあろうか』と述べられているので、ジャマッドアグニの末裔の状態と正反対のラグの子孫の状態が、華奢さによって説明されているにも拘らず、『タータカーの殺害者〔たる彼〕と』という、相対立する香気を含む意味が、〈非適切性〉によって、何とも知れない形で心の中に萎縮を与えている。』

Rājaśekhara's Verses in Kṣemendra's Treatise on Poetics

Kazuho YAMASAKI

The *Aucityavicāracarcā* of Kṣemendra (ca. 990–1066), comprised of thirty-three verses, is a treatise on poetics which deals with the question of 'propriety' (*aucitya*): what is an apt expression to be used by a poet. In his view, poetry must be written with 'propriety', which is the soul (*jīvita*) of it. In the work Kṣemendra argues twenty-seven factors for which the propriety must be taken into account, explaining eight of the factors by quoting ten verses from the works of Rājaśekhara (ca. 9th c.–10th c.), who is known as a major poet that exerted a considerable influence on the former. The aim of the present paper is to consider how Kṣemendra examines the verses according to his theory on propriety.

The eight factors are: *vākya* 'sentence', *prabandhārtha* 'composition meaning', *guṇa* 'quality', *alaṅkāra* 'figure of speech', *rasa* 'sentiment', *kāraka* 'action-participant', *deśa* 'place', and *avasthā* 'circumstances'. With respect to the propriety pertinent to *vākya* and *rasa*, Kṣemendra admires Rājaśekhara, while for the propriety pertinent to the others, he criticizes him. Kṣemendra's critique shows that as Rājaśekhara attaches much importance to formal beauty, his poetry tends to lack in literary grace.